

# 円熟の初キャップ。

骨砕くタックル、激しいラン。ミッドフィールドの支配者に

文>村上晃一

韓国戦の2トライは痛快だった。前半25分、SO伊藤宏明とのシザースからスピードに乗ってゴール中央へ。後半1分にも、サインプレーで防御を崩し、瞬時の加速でインゴールを陥れた。

「内側のディフェンスが空いているって、大介（大畑）と話していたので、狙い通りでした」

後半16分、選手の入替えてピッチを去る背番号12へ送られた大きな拍手は、充実のパフォーマンスを証明していた。観戦者にはもどかしい引き分け試合で、一人気を吐いた向山昌利は、確実にファンの心をつかんだのである。

遅咲き、と書いては申し訳ない。1998年度同志社大学キャプテン、卒業後入社したワールドでは'99年度全国社会人大会準優勝を果たす。'01年度はワールド副将、23歳以下日本代表にも選出された。激しくヒットするタックル、パワフルな突進、実力は申し分なかった。

ただし、同時代のCTBは、元木由記雄、吉田明、難波英樹という名手揃い。'03年W杯日本代表にはジョージ・コニア、ルーベン・パーキンソンのニュージランダーが名を連ねた。いつだって代表を伺える実力者に日本代表入りのチャンスは巡ってこなかった。'02年、海外挑戦を志し、ワールドを退社。NZ、イングランドのクラブを渡り歩いた1年間も、日本ラグビーにおける彼の存在感を薄れさせていた。

しかし、その才能は帰国後に入社したNECで再び花開く。28歳の即戦ルーキーは、NECのレギュラー争いの中でも

激戦区のCTBであっさりポジションを獲得。以降、NECのミッドフィルダーとして、マイクロソフトカップ優勝に貢献する。新生・萩本ジャパンのスコッドに名を連ねるのは誰の目からも明らかだった。

そして迎えた日韓戦、国歌斉唱の時間帯、向山は高鳴る胸の鼓動を抑えきれずにいた。

「ジャパンになれると思っていなかったもので、選ばれて嬉しかったですね。国歌を聴いて、ブルブルしてきました」

試合中のプレーぶりは堂々たるものだったが、本人は不満だった。

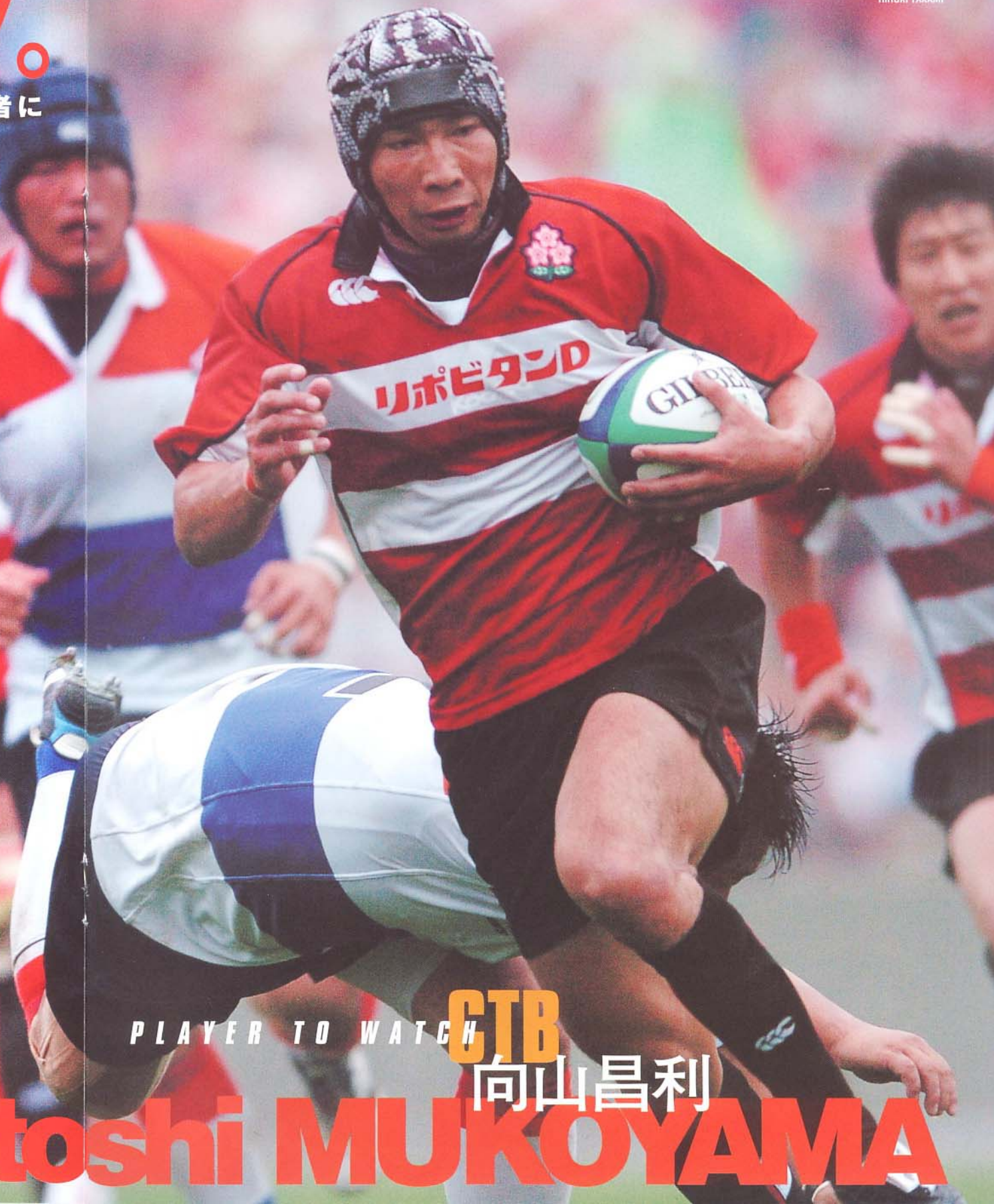
「自分の持ち味である激しさがなかったです。アウトサイドCTB（大畑）にボールを集めることばかり考えて浮き足だっていました。自分のチームという気持ちも足りませんでしたね」

日韓戦の直前合宿が短期間だったとはいえ、向山はコミュニケーションを十分にとれなかったことを悔いていた。現日本代表では、1975年生まれはゴールデンエイジと呼ばれている。キャプテン箕内拓郎、大畑大介、伊藤護、池田渉、平尾剛史、伊藤宏明らである。同じく'75年生まれの向山にとっては、やりやすい環境だったわけだが、やはり初めて選ばれた遠慮があった。だが、スーパーパワーズカップは違う。

「よそ行きのプレーではなく、身体を張ってプレーすることを大切にしたい。相手がどんなに強くても負けたくない。納得のいく試合がしたいですね」

円熟のCTBが、骨砕くタックルで日本代表を勢いづける。

日韓戦では絶妙のコースを走ったものと、壁をぶち破ったもの、計2トライ  
HIROKI TAKAMI



PLAYER TO WATCH

CTB

向山昌利

Masatoshi MUKOYAMA